

大島は、小布施町における最も生産性の高い農業集落である。一戸当り平均耕地面積は115a、専業農家率40.1%、一戸当りりんご園面積71.5aと全て、集落中第1位を示す。

以上の様に、16の集落を概観した結果、現在の各集落に至るには、どの集落においても、自然条件・歴史的発達要素が、深く関わっている事が解った。

山梨県曾根丘陵地域における養蚕業

鈴木京子

1930年の恐慌後、養蚕業の衰退は著しいが、甲府盆地南縁の曾根丘陵地域は、果樹生産地に隣接しながら養蚕地帯を形成している。本論文では、曾根丘陵地域における養蚕業の現状を把握し、その背景をさぐることを研究目的とした。

第1章・第2章で、自然人文環境の両面より本地域の養蚕業の背景・果樹化の遅れた要因について考察し、第3章に於て、全国の養蚕業の変遷・現状を把握した。これらを基礎として、曾根丘陵地域の養蚕業については第4章で言及し、山梨県又は甲府盆地内での位置付けを行ないながら、その特徴を明らかにした。

近世より柳沢吉保の養蚕奨励・郡内織生産地の存在・副収入を求める零細業の存在が、明治以降も県令の養蚕・製糸業の奨励をはじめ現在に至る県・関係諸機関による援助が、山梨県さらには曾根丘陵地域の養蚕業の進展・存続に果たした役割は大きい。戦後、甲府盆地では桑園の果樹園化が進んだが、気候的には多雨で、地形的には排水不良の平地と傾斜の比較的急なうえ、干害を受けやすい丘陵地からなり、道路網も未整備である曾根丘陵地域は果樹栽培には適さない。

このため、この地域は桑園残存率・桑園率の高い山梨県の中でも特にその値が高い、県下随一の養蚕地帯となっている。その上、反当収繭量が高く、一戸当り規模も大きいため労働生産性が高く高収入を誇る。県・関係諸機関の援助に加え、集約的経営につとめ、肥料・労力の大量投下、掃立回数の増加、一之瀬種の使用を行なった結果である。又、開墾、田畑からの転換、さらには桑園の借用、買桑によっても規模拡大しようとする積極的養蚕農家が存在するため荒廃桑園もなく、集落あるいは町村単位の養蚕地帯としての性格を持つ。

しかし、養蚕業の衰退はくいとめられず、安い輸入品に国内市場まで奪われかねない情勢となって、ついに輸入規制措置までとられた。特に最近の桑園面積の減少は全国・山梨県共に激しく、曾根丘陵地域でもこの数年間で養蚕業のピークはすぎている。さらに稚蚕共同飼育の遅れ、傾斜地・肥料労力の大量投下の結果として労働時間が多く、生産費が高い、居宅内での蚕飼育、老朽桑園といった問題を抱えるうえ、近年は、この地域の養蚕業の優位性を表わす土地生産性の高さ、大規模経営ということに関しても頭打ちである。こうして果樹との収益面での差も拡大しつつあり、所得面でのこの地域の農家の県内における位置も、果樹地帯の農家に追い越されて相対的に低下し、それに伴って兼業率は増加した。地域内部での農業粗生産額の構成面でも養豚・野菜・果樹の比重が増加しており、曾根丘陵地域は養蚕専業から、これらとの複合経営に移行しつつあるといえる。ただし、養豚は厩肥の

桑園への還元などの点で養蚕と共存的であるのに対し、果樹は土地利用上・労力配分上および農産散布の面でも養蚕とは競合する。養豚・果樹の分布も異なり、養蚕・養豚の複合経営の行なわれる西部・南部では養蚕に対して積極的に果樹化が進まないのに対し、果樹の比重の高い東部・北部では養蚕に対して消極的である。

商業から見た土浦市の研究

田 中 佐和子

土浦市は、人口約10万、茨城県南部の地方中心都市である。東京からは60数キロに位置し、北には筑波山、東には霞ヶ浦を背景に、緑と水に恵まれた穏やかな都市となっている。

江戸時代の城下町から、そして、予科練で名高い軍事都市へと、それぞれの時代に特徴ある発展をしてきた土浦市は、従来の、農村地帯を背景とする地方中心都市から、近年ではますます、首都圏の衛星都市としての性格をも強めてきている。

また、一方では、土浦市に隣接して、筑波研究学園都市(目標人口22万)が建設中であり、まったく新しい都市であるだけに不確定の要素も多いが、土浦市に少からず影響を及ぼすことが予想されている。

この論文では、このような土浦市という地域について、その発達と構造を見ることで、その性格を考えたいというのが目的である。商業活動は、そのための視点として選んだ。

土浦市の性格を考える時、その最も基礎的な要因として

- ① 地形が平坦で、気候も比較的温和であり、人間の居住という点で、恵まれた環境に位置していること。
- ② 霞ヶ浦の西の端に位置していること。
- ③ 首都東京から60数キロの東北側に位置していること。

この3点をあげることができると考えられる。この3つの要因は、土浦市の発達、構造において常にその根底となった性格であるが、これらは現在の土浦市に

- (1) 独立した一地方中心地として
- (2) 首都圏の衛星都市として
- (3) 筑波研究学園都市に隣接する都市として、3つの側面を与えている。

商業活動において見るならば、県南の中心としての規模をもつ土浦商業の位置は、土浦が、周辺農村や霞ヶ浦を背景に中心地として発展してきたことを示しているし、また、卸売業における最近の伸びの低さや、小売業における相対的な買物機能の低下等は、土浦市が首都圏の衛星都市としての一面を強めてきたことを示していると考えられる。そして、中心商店街の構造には、土浦の発展の歴史や地域性を反映した土地利用が見られる。

このような性格を示す土浦市は、近年においてますます、首都圏の衛星都市としての一面が前面にでてきているように思われる。